The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文彩 : 隠喩の存在とその同定
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1983, 9, p. 293-318
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11849
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文(あ)　彩(や)

——隠喩の存在とその同定——

菅　野　盾　樹

目　次

序　論　文彩がなぜ問題か，いかにして問題になりえるか
第一章　隠喩的意味は存在するか
第二章　隠喩はどのように解釈されるか
（以上『年報人間科学』，第3号，1982年所収）
第三章　隠喩は言語にとり余分か
第四章　隠喩の基準とはなにか（以上本号）

文彩（あや）

——隠喩の存在とその同定——

第三章　隠喩は言語にとり余分か

文彩についてひきつづき探究を進めるのにあたり，われわれは以下の戦略に従うことにする。これまでに文彩の解釈理論にかんしてあげられた利得，具体的に言えば，その豊潤な理論的可能性に測鉛がくだされた<修辞論>にあくまでも踏みとどまり，そこから眺めるとき，文彩の現象がどのような姿でたちあらわれるか，その点を多様な視角で見届けること。この戦略を実地に移す場合に，まず設定された目標が，この章の標題に掲げたように，隠喩の存在証明というわけなのだ。すでにわれわれの論考が隠喩について数多のことばを費してきた以上，いまさらこんな問を持ちだすことはかえって奇妙な仕業のように思われるかもしれない。隠喩について語る行為は少なくともその存在を暗に含意しているはずだからである。万一隠喩などというものがないとするならば，折角のこの論考も，ちょうど桃太郎の行為を物語った昔噺の真偽を問うのが場違いであるように，その真理値は問題外となり，およそ<理論>などというしろものではなくなるだろう。隠喩がたしかに存在すること，それはわれわれの確信するところである。それならかの問は，殊更なる懐疑論の無責任な放言，人をこまらそうとして言いつのる論難だろうか。決してそうではない。もし懐疑論を云々しうるとしても，それは隠喩の解釈理論をいっそう確実にするための方法的懐疑にほかならないのだ。

設問の正当化のために，すでに触れたグライスの比喩理論，ならびにその展開として構想されたスペルベルらの修辞論をここでほんの少し観てみよう。すぐ気づかれる点がある。どちらの理論も，比喩の解釈が少なくとも必らず二段階を踏んだ過程であることを暗に示していた。そしてこの点はあらゆる可能的理論にかんしても別様ではありえないだろう。つまり文彩の解釈は次のように進行する。第一に，聞き手は話し手の発言が比喩に染っているのか，それとも字義通りに解しうるのか，それを決めねばならない。次いで，もしもそれが比喩まじりの発言であると決まったならば，その発言が比喩として本当は何を意味しているのかを割りださねばならない。グライスは第二の段階が会話の含み（conversational implicature）の計算によって尽されると考えた。これに対してスペルベルらは，それだけでは解釈の完了は望めない，新たに呼び起し（évocation）の過程がそれへ継続すべきだと論じたのである。

いずれにせよ，聞き手は文の出現に出会ったさい，解釈過程のどの段階にまで踏みこむべきか決定しうる戦略をあらかじめたずさえているのでなければならない。言うまでもなく，当面する問題は解釈の第一段階にある。いったい聞き手はどのような基準で文彩，とくに隠喩を，それと判別しうるのだろうか。それゆえそのような基準の明示を修辞論に対し要求しようではないか。もしもこの要求に修辞論があやふやな答えしかできないなら，われわれの確信にもかかわらず，理論的には，隠喩の存在には重大な疑義が存する，と言わねばならない。

普通われわれは大抵の場合何が隠喩であるかを直観によってわきまえている。それだけでなく隠喩判別の理由についてもいささか知っているのである。たとえば「人間は考える葦である」は隠喩にちがいない，というのも文字通りに言って人間が葦でないことは，自明だからである。他方，「人間は考える動物である」は字義通りの発言にすぎない。これも直観に照らして確かなことだ。それは言語の至極ありきたりの使用の一例であって，隠喩におけるような法外な，常規に外れた言語使用の痕跡が何一つないように見える。たしかに，発言に隠喩が混っているかどうか決裁する権限は最終的に直観に属している。しかしそれはあくまで権利のことがらであって，事実上は個別的な直観ではどうとも決しかねる曖昧な事例がないだろうか。そのような事例に対処するには，より抽象的な水準へ遡行する分析の助力を乞わねばならない。思いつくまま一二の例をあげてみよう。「人生は闘いだ」，「衝動と闘う」，「重苦しい心」など。これらは隠喩だろうか。この問に答えるためには，直観は分析と手をたずさえる必要があろう。

はじめに「闘う」が一義性を持つと仮定しておく。それは＜人と人とが肉体によってのみ相撃つ＞といった意味だとしよう。ではお尋ね者と警官が拳銃で撃ちあうことを一口にどう呼んだらよいか。それに適した単語が他にどうしても無いなら仕方がない，これまで別のことを言うのに用いてきた「闘う」を流用して，それもまた同一の語で称するようにすればよい。一般に，このような語の意味上の横すべりを＜濫喩＞（catachresis）と言う。こうするとたとえば「警官は犯人と闘ったすえ取り押えた」と語りうるようになる。しかし「闘う」の原義からして，明らかに，この発言におけるその語の出現は常規に外れた使われ方をしていると言わねばならない。しかしそうした言語使用の事実を否認するわけにはゆかないから——事実，それは定義からして認めざるを得ぬものである——言語使用の理解の方に変更を加えるしか残された手だてはない。すなわちそれは隠喩として用いられているのである。

われわれは実はここで隠喩の濫喩起源説に直面しているのだが，しかしこの説はとても認めるわけにはゆかない。語彙の不足を補うために濫喩を導入せざるを得ない必然性，あるいは隠喩の発生学と，隠喩が実際どのように機能するか，あるいは隠喩の本質学とは，別である。肉体のみで闘うことと銃や場合によっては戦車や爆撃機まで駆使して闘うことは，概念

として区別できる。それぞれは別の事柄だ。別の事柄に別箇の名辞があつらえられていなかったことは，当の言語にかんする一つの事実にすぎない。語が空所を塡めたとき，なるほど，語義の「横すべり」が生じているように見える。しかし真実を言えば，その刹那その語は別の意義を得たにすぎないのである。要するに，今や「闘う」は両義的になったのだ。ブラックはこの間の経緯をこう巧みに述べいる。「濫喩は，それがうまくいった場合には，消失する。それが濫喩の運命である。」[1)]

同じ仮定からスタートして異った道筋を辿る可能性を考察してみよう。先と同じように語「闘う」の意味を決めておく。その上で次のような状況を想像してみよう。少年である私が己れの肉体のうちにそれまで絶えて気づかなかった，それゆえもちろん名状すべくもない「衝動」——この名も遅ればせのものであって，まさにこの時それを生きる私にとってその名は存在していない——異性に触れたいという衝動が発ったことに驚愕し，何かの理由でそれを抑えつけその息の根を止めようと身をもがく。と，そのさなか，少年の心の声は，＜自分はそれと闘っている＞と悲痛な叫びをあげたのだ。もとより彼は「闘う」が本来何事を意味すべきかを，無自覚にせよ，知っている。たとえば彼は兄弟と遊ぶところを他人が「汝らは闘っているのか」と訊ねられる場合，それに正しく「否」と答えられるのである。その彼が名状しがたい心理を，いわば苦しまぎれに，今はじめて「闘う」と称したのだ。原義とは異る言語使用という点で，少年が濫喩を用いたのは明らかである。しかし前の例と相違する顕著な点は，この例が純然たる濫喩の運命を共にしないことだろう。換言すれば，「闘う」の新たな使用は生れ落ちた途端，比喩として息絶えはしないのである。それというのも，前の例では，＜肉体で闘うこと＞と＜拳銃で闘うこと＞とはもともと概念として区別されていたのに対して，今の例ではそのような概念上の区別をあらかじめ確保していると考えるのが無理だからである。概念上の区別が予約されていたからこそ，名辞の片手落ちを補うのはいとも容易なのだ。しかし今問題なのは＜衝動と闘う＞という概念それ自体である。この大切な点をさらに掘下げてみよう。

新しく次の仮定を設けることにしたい。問題の言語において，手に棒を持って人とわたり合うことを「争う」と言うと仮定する。この場合に，拳銃で闘うことを既得の語彙の流用で表現しなければならないとすれば，「闘う」と「争う」のどちらが採用されるだろうか。どちらがより好まれるかについてア・プリオーリな理由を見いだすのは困難である。なるほど，武器の有無が格別関心の的になるような言語意識が働くとするなら，怖らく「争う」が択ばれる蓋然性が高いと言いうる。そうかといって，武器の有無が有意的であるとしても，拳銃を用いる闘争がむしろ「闘う」と呼ばれる可能性を根こそぎ排除できないし，何かの理由で実際それが選択されることを十分想像しうるのである。たとえばその理由として，問題の言語が属する文化においては，拳銃が武器としてではなくむしろ祭器に分類され，肉体の闘い

がもともと高度に儀礼的な意味を表出する，といった背景を考えることができる。要は単語の不足をすでに手持ちの語彙から何らかの動機に従って補えばよいのであってあって，その単語の本質は問うところではないのである。こうして「闘う」が択ばれたとしよう。この語は両義的である。混乱を防ぐには肉体で闘うことを「闘う$_1$」で，銃で闘うことを「闘う$_2$」とでも呼べばよい。しかしある意味でこうした名辞の複製は冗長にすぎない。その一つの証拠に，われわれは今しがた「肉体で」とか「銃で」といった限定詞をつけて同じ「闘う」という語を使ったではないか。これに対し次の異論が当然でるだろう。はじめに「闘う」の語義は<肉体でのみ人と相撃つこと>と規約されたはずではなかったか。それゆえ，拳銃で人とわたり合うことは，定義上，<闘い>から自動的に排除されねばならない。とすれば，「銃で闘う」における「闘う」は，定義された「闘う」と，ちょうど「話す」と「放す」のように同音意義の関係にあるはずだ，と。この異義が形式上正しいことは認めねばならない。にもかかわらず，それだけでは片づかぬ問題がまだ残っていると思われる。

「闘う$_1$」と「闘う$_2$」とは互いに両立せず，この意味で何ら共約性を持たない。「誰それは闘い$_1$つつ闘う$_2$」と言うのは矛盾である。けれども両者は，一連の文の中で，その文の真理値を損うことなく互いに代置しうるという意味で，類同性を持つ。たとえば以下のような文で n は1か2のいずれでもありうるだろう。

(1) 闘う$_n$ 者は傷つくことがある

(3) 敵と闘う$_n$ ために誰それは訓練している

(3) 闘う$_n$ ことは，少なくとも二人の人間を項とする関係である，等

もっと簡単に言えば，概念<闘う$_1$>と<闘う$_2$>は<闘う>という論理の部分である点で類

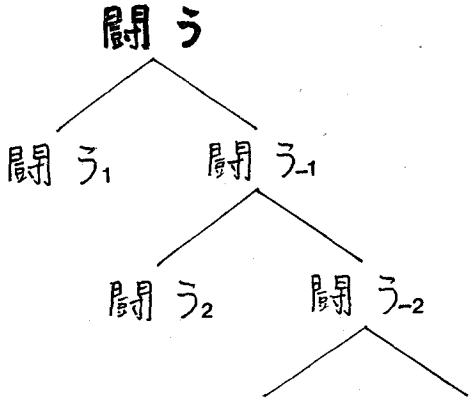

表 1

似し，しかし部分同士の論理積が零である点では類似していないのである。もちろんこの関係は一つの可能性にすぎない。しかしここで確認すべきなのは，そうした可能性の可能性にほかならない。関係をプラトン流儀の二分割法を使って表示しておこう（表1）。

では「衝動と闘う」における「闘う$_i$」（このように i を添えることにする）と「闘う$_1$」とについてこのような論理的な関係の可能性は可能だろうか。この問を調べるには，はたして次のような表示がありうるかどうかを観察すればよい。

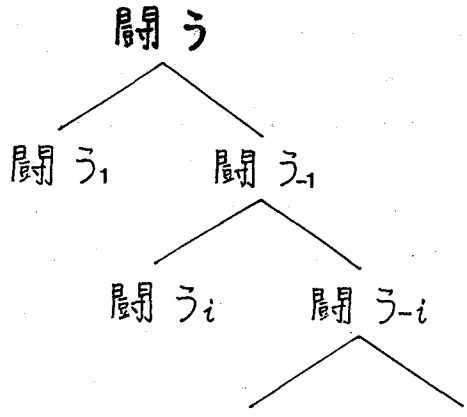

表　2

<闘う$_i$>は<闘う$_{-1}$>の一つに数えられるだろうか。仮にそうだとしても，では衝動と闘うための武器とは何だろうか。それがナイフでないことは確かである。「鞏固な意志で衝動と闘う」と言うことができる。しかし「鞏固な意志」の指すものが武器を商う店で売買されていないことも，また，確かである。他方<闘う$_1$>と<闘う$_i$>とはその積が零になるだろうか。反例を考えるのは難しくない。「彼は内心の衝動（殺意）と闘い$_i$ながら，自分の生命（いのち）を守るため止むなく相手と闘った$_1$」と矛盾なく言うことができる。結局，<闘う$_i$>と<闘う$_1$>とは，このような仕方では関係し得ないのである。

このような差異の理由はどこに横たわっているのだろう。<闘う$_i$>と<闘う$_1$>とは，<闘う$_1$>と<闘う$_2$>とがそうであるように，概念として別箇である。しかし前二者の区別はこれを区別する認識の働き以前に，リアルなものとして先在してはいなかった。それは，区別立てによって，また区別立てのうちに存在するにすぎない，と言わねばならない。このような見地に，実は，隠喩の認識力にかんする重大な論点が含まれているのだが，それについては後に詳説する機会を作りたい。ここでしっかり見届けるべきなのは，ブルーノ・スネルが具体例を通じて呈示し[2]，ジェームス・エディによって追認され[3]，また両者とは独立にマクス・ブラックによっても主張された[4]，そのような見地そのものである。われわれは

彼らの見解を大すじで是認する立場から，今しばらく論点を掘下げておきたい。

文献学者スネルは，古典ギリシャの文献学的探究を通じてヨーロッパ精神がギリシャにおいて誕生した経緯を，換言すればどのようにかの精神が「発見され」たかを跡づけている。序論でいちはやく彼は<精神の発見>——これは著作の標題でもある——という視角がはなはだしい逆説にみちている事実に，厳重な注意を促し，そのさい比喩理論一般にとって看過しえぬ示唆をおこなった。彼は言う。ホメーロスの描く人びとはいまだ<精神>を持ってはいない，それは実にホメーロス以後の発見物なのだ，と。しかしスネルに言わせれば，ここで発見を云々するのはやむを得ぬ隠喩にすぎない。<精神の発見>を<コロンブスのアメリカ発見>と比較してみればよい。このイタリア出の航海者がアメリカを見いだす以前から，そのアメリカは厳然とあった。アメリカの原住民にとって，1492年に自分たちの住む土地が発見されたなどという他所者の言い草がいかに理不尽かは，言を俟たない。これにひきかえ，「精神はそれが発見されることによって初めて生じたのである」[5]。白状すればここで再び隠喩が引き入れられたのである。というのも，「生じる」ものは何であれ，生じる以前には存在しなかった，無であったのでなくてはならず，そしていったん生じた暁には，それはいやしくも事物の数に入れられうるような何かものでなければならないのに，精神はといえば，まるでそうしたものに似ていないからである。ホメーロス以前のギリシャ人がわれわれのように思考したり感じたりしなかったとでも言うのだろうか。そんな想定は明らかにばかげている。それならある意味で彼らにもすでに精神はそなわっていたのでなければならない。精神がまるで芸術作品や工業製品のように，ある時点でこの世界へ生れてきたとは字義通りには考えられない。こうしてスネルは，<精神の発見>という言い方がそれ自体隠喩，しかし必要不可欠なそれだ，と言うのである[6]。

スネルの主張を整理しよう。第一に，<必要な隠喩>というものがある。換言すれば字義的翻訳によって消去できない，存在理由（レゾンデートル）を有する隠喩がある，と言うのだ。第二に，そうした隠喩はとりわけ人間の自己に深くかかわっている[7]。この二点を先程の例によって仔細に例証してみよう。<闘う$_i$>の概念は発見されると同時にそのとき誕生した。もちろん<闘う$_i$>と<闘う$_1$>とは概念として別箇であり，だからこうして別々の呼び名を与えうるのである。しかし<闘う$_i$>に元来自前の名が無かった事実は，<闘う$_1$>/<闘う$_2$>の区別の場合とは異なり，たんに言語上の事実ではない。少年が己れのあの怪異なものとせめぎあったとき，彼はこれを<闘うこと>として掴みだしたのだ。換言すれば<闘う$_i$>という概念はその命名と誕生を共にするのである。それゆえ少年の言語には初め「闘う$_i$」という名辞が欠けていたとか，語彙が不足していたとか言うのは正しくない。それはそれなりに充溢しており完全だったのである。というのもこの場合，名辞の不足を測る概念の尺度を云々することが当を失しているからだ。われわれが問題にしているのはカッシーラーの言う「根元隠

喩」(radical metaphor) である。それは先在する観念のたんなる翻訳ではなく，「実に範疇そのものの創造」[8] にほかならない。

とりわけ人間の自己についての把握は隠喩としてしか成り立ちようがない。なぜだろうか。自己とは隠喩の住家(エレメント)だからである。むしろ逆に，畢竟自己とはつねに隠喩として現われるかぎりにおいて自己でありうる，と言うべきだろう。もしここでスネルの小さな瑕瑾をあげつらうことが許されるなら，彼の犯したある混乱を指摘しなければならない。すなわちスネルが「精神の発見」という表現は「発見」の通常の用法にそぐわず，それゆえ隠喩でしかない，と述べるとき，彼は感違いしている。かつて無かったものをあらためて見出すことを，人は「発見」と称する[9]。「発見」のこの語義はスネルの論点と何ら撞着していない。物理的なあのアメリカは，言うまでもなく，コロンブスがそれを発見する以前からあった。しかしコロンブスにとって，目撃されたかぎりでのアメリカは，発見以前には無かったのである。この点に関連してブラックは，エヴェレスト山頂から上空100フィートの位置から見た山の景観 (view) は，はたして，たとえば500年前に存在しただろうか，という主旨の設問をしている。ある意味で人は肯定の答をするだろう。つまり，もし誰かが500年前に飛行機か何かに乗ってその点から山を見たならば，まさにその景観が与えられたはずである，という意味で，それはつねに存在していた。しかし反事実的仮想の限定をとりはらって，たんにその景観はつねに存在する，とは言えない。そうすれば神の視覚のなかに永遠に安らう＜誰も視ない景観＞ (*unseen* view) などというものを存在者の列に加えねばならぬ羽目になるだろう[10]。といって，その景観がたんなる主観的なものにすぎない，などと言うのは馬鹿げている。なるほど＜景観＞は論理的に＜視る者＞を含意するが，しかしそれがエヴェレスト山にかかわる客観的事象の一つであることには変わりないのである。＜関係＞と＜関係の体験＞とは区別されねばならない。同じように，コロンブスが発見した＜アメリカなるもの＞は，原住民が住んでいた場所，あの物理的なアメリカとは別である。その一つの証拠に彼らは自分たちの土地を「アメリカ」と呼んではいなかった。その名はこの大陸の最初の探検者アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) のラテン名 Americus に由来するにすぎない。＜アメリカなるもの＞はコロンブスの発見の事業の成否にかかわらず，つねにあった，とは言えないのである。もしコロンブスのような，アメリカの存在を信じそれを探し求める者が，コロンブスがそうした以前にそれを見出したならば，まさにその存在を信じられたアメリカが，そのように存在したはずだ，という意味で，アメリカはつねに存在する——われわれはただこう言えるばかりである。

こうして隠喩は事実上存在するばかりか，必然的に存在する。言い換えれば，人はある事象を言うのに，それとは別の事象を意味する表現を正当にも流用せざるを得ないのである。「正当にも」と言うのは，この流用がかりそめではなく，濫喩の場合のように流用と同時に

流用の事実が帳消しになるような仕儀に至らないことを意味する。しかし，隠喩の存在証明の企ては，<必然的隠喩>の考え方によってまたもや肩すかしをくらうのではないか。われわれの懸念するのは，そうした考え方が極端まで押しすすめられると，むしろ隠喩の見分けがつかなくなり、殊更に「隠喩」を語るのが無意味になりはしないか，という点である。これが杞憂にすぎないのかどうか，もう少し詳しく検討してみよう。

今あらゆる語がその誕生時に何か具体的な事象を意味したような言語を想定してみる。思考の言語相対論で名高いウォーフは，フランスのヘブライ語学者ファーブル・ドリヴェの影響のもとにひところ<結合成言語> (abligosynthetic language) なる言語観を抱いていた。それによると，メキシコのアズテク語やマヤ語のあらゆる語彙はごくわずかな語根ないし意味要素へ還元されてしまうという。たとえばマヤ語の QE- ではじまる語幹はすべて<巡る>という意味成分を持ち，BI- のそれは<動く>という意味成分を持つ，などという具合である[11]。彼のこうした言語観はわれわれの想定のモデルとみなしうるだろう。また語原の説明にこの種の仮定が用いられる場合がある。漢字の語原説はその顕著な一例である。たとえば「放」の起源について文字学者はこう説いている。この字の偏「方」は甲骨文によってみるに屍体を架した形である。辺境の地に屍体をさらして境界を侵さんとする悪霊をおそれさせた古俗があったのである。旁の「攵」は屍体を打って放逐する意を示す[12]。つまり「放」とは追放の一形態，斬首祭梟の俗を意味するのだ。わが国にも荒ぶる神としてのスサノオノ命が千倉戸を負うて追放される物語があるし，ギリシャのポリス国家でも，殺人者は刑罰としてよりもむしろ神への穢れを祓う意味で国外へ追放された。「放」も後にこのような国外追放をも言うようになる[13]。しかし現在怖らくその字をこうした初発の意味で用いる者はまずいないだろう。だとすると「放水」,「放言」などの用法はいずれも語原からすれば隠喩にほかならないのである。以上のような言語観を例を離れて今一度一般的に述べれば，それは言語を，ある少数の語を除いて他はすべて徹頭徹尾隠喩でしかない，とみなす立場だと言えよう。デカルトに対抗したヴィーコやスネルなどはこれに近い言語観の持主である。さて，今一歩を進めて，少数の例外を含めて言語全体が隠喩であるという極端な言語観を考えてみよう。換言すれば，この言語観においては，あらゆる語が必然的隠喩である、という仮説が立てられているのである。もしこのような言語観が成立しうるとすれば，しかし，殊更に隠喩を云々すること自体が空しくなりはしないか。字義通りのものがあって，隠喩ははじめて隠喩である。すべての語が隠喩にほかならぬ，と言明した途端に，かえって隠喩の存在はその影をうすくせざるをえないだろう。

このような極端な言語観を認めるわけにはゆかない。それは今しがた述べたように，隠喩は字義的なものあっての隠喩であるというア・プリオーリな理由もあるが，また別に言語の具体的な構成を観察してみれば，明確にされるところである。エディの指摘のとおり，言語

の音韻論，形態論，構文論の各水準に隠喩の介入する余地がないことは明らかである。たとえば音素 /z/ は，それが出現するたびに厳密な同一性を保持している。また形態素 s も，それが生じるごと同一の意義（ここでは英語における名詞の複数）を持つのである。いずれも厳密な形式性，反復可能性，理念性の域にとどまっていて，隠喩に特異な性状である意味のぶれ（polysemy）の余地は毛一すじほどもない。隠喩の可能性は，エディの言うように＜語＞の水準ではじまる[14]。語はたんに構文論的標識（たとえばこれこれの語は動詞であるという標識）を伴うのみならず，言語外の事象へのさしむけ，すなわち指示性と，それの出現の事実から来る規定性すなわち文脈性（たとえばある発言中の「それ」が何を指すかは文脈次第である）とをそなえている。それゆえ，ここで言われた＜語＞とはたんに「意味論」の水準に属する語ではない。それは発言（型代文）のなかで使用されるかぎりにおける語であり，このかぎり少くとも語用論の水準に達している語なのである。だとすれば，隠喩は語と共に始まると言うよりは，それは発言と共に始まると言った方が誤解の惧れがないだろう。エディの整理にはこの点が明確にされていない憾みがあるが，しかし隠喩がソシュールの言語（langue）ではなくて発語（parole）に属する現象であることをはっきりさせたこと，しかも隠喩が語の理念性を条件とすること，言い換えれば意味論の水準における語が語用論の水準における発言中で使用されることによってはじめて隠喩が生じることを明確に述べたこと[15]は，大きな意義を有している。つまり隠喩現象に特有な意味のぶれは，かえってわれわれに語のいわば手つかずの意味を予想させるのでけなればならない。それはある言語共同体の成員に容認された公共的な，辞書に記載されうるような意味，しかも語のその都度の使用とは没交渉に同一性を保ちうるような語の理念的意味にほかならない。フレーゲの述べた Sinn はこの種の存在者である。といってわれわれはこのような＜意味＞をそのまま認めるものではない。クワインがこの種の＜意味＞に否定的なのはよく知られている。彼によれば意味の同一性（同義性）の満足すべき基準は存在していないし，そもそも同義性は通常考えられているように談話の短い断片あるいは文にかんするよりも，もっと長目の部分あるいは文の集団にかんしてはじめて問題となるものなのである[16]。意味という実体を斥けるクワインの意味論ははなはだ行動主義的な趣きの濃いものである。意味を存在者としては認めない点でまたそれは唯名論的な意味論だとも評しうる。ここは問題に深入りする場所ではないが，われわれはクワインの行き方に同情的であることを表明しておきたい。と言うことは，しかし，単純に「意味がない」と主張することとは別である。したがって，隠喩の存在を明言することは意味の実念論を伴うわけではないし，それゆえまた，意味の唯名論と矛盾するものでもない。要約すると，語の理念性は，それが発語の場面へ引きたてられ実際に使用されることによって，さまざまに揺らぐ。逆に言って，そのような揺らぎの中にある均衡としてしか，発言中の語の意味は存在しえないのである。隠喩の可能性も隠喩ならざる字義的なもの

の可能性も，共にそのような事態に属している。

第四章　隠喩の基準とはなにか

今われわれは安んじて隠喩はあると言うことができる。するとただちに一つの課題が行く手に立ちふさがるだろう。それは隠喩の同一性の基準をどのように定式化すべきか，という問にほかならない。隠喩は構文論の現象でないのはもとより意味論の現象でさえなくて，すぐれて語用論的現象である。問題の難しさはこの点に由来する。というのも，ブラックが言うように，隠喩が隠喩である所以がたんなる「言語規則」のみならず，それ以外に「話し手の意図，声の音調，言語背景等」にも拠る[17]のであれば，隠喩が担う何か簡明な標識を見出すことが，はなはだ望み薄になるからである。そこでディヴィッドソンはこう断言してはばからない。「隠喩を考案するための処方はないし，隠喩が「意味する」あるいは「語る」ものを決める手引き（マニュアル）もない。鑑識眼などはいらない隠喩には，その検査方法はないのである」[18]。彼はそれでも，もしもその論述を真面目に受けとらねばならないとするなら，隠喩の存在を前提しているのであって，隠喩の「検査方法」は彼にとっても問題になるはずのものなのである。

既述のようにグライスは会話の作法，質の一，君が偽だと信じることを信うな，の違犯をもって，発言が比喩であることの条件とした[19]。この場合比喩には隠喩をはじめイロニー，曲言法，誇張法などが含まれるから，問題の作法違犯がただちに隠喩の同一性基準として使えるわけではない。違犯の事実は発言が一つの可能性として隠喩を病んでいるかもしれぬという徴候にすぎない。言い換えればそれはせいぜい隠喩の必要条件なのである。しかし残念ながらこの点はスペルベルらの反駁を免れることができない。彼らの示すところでは，作法違犯は隠喩のみならず広く比喩一般の十分条件はおろか必要条件ですらないのである[20]。ブラックもまたこの種の作法違犯が隠喩の必要条件ではありえぬことをやはり反例でもって示している。誰かが「人間は狼だ」と言うのに対して私が「いやちがう，人間は狼ではない，駝鳥だ」と言ったとせよ。私の発言中の「人間は狼ではない」は文脈上明らかに隠喩であると思われる。しかしそれは偽であることを述べているだろうか[20]。作法違犯が隠喩の十分条件でないことは，あらゆる偽の発言がすべて隠喩になるとはかぎらぬことから，言うまでもないことである。

スペルベルらはグライスの作法にかえて＜有意性原理＞を提出した。それは＜話し手は最も有意的な陳述をなそうと最善を尽した＞ことを主張する解釈の規制原理である。彼らの見地は＜有意性＞の巧みな規定のおかげでグライスの不備をよく補っていると評しうるだろう。このポイントを例証してみよう。後にもとりあげる予定でいるサールは，グライスに類似す

る見地から，比喩の解釈過程の第一段階に触れてこう述べている。隠喩まじりの発言は文字通りにとれば欠陥を持つ（defective）——偽，ノンセンス，言語行為の規則違反，会話原理の違反——ような発言のことだ，と。そこでもしもこうした徴候が発言に見てとれる場合，聞き手は文（sentence）に盛りきりの意味とは別の，発言（utterance）の意味を探索しなければならない。ここまではグライスと表現こそちがえ同じ主旨の見地が示されている。しかしサールは周到にも付言している。大体のところこれで間に合うとはいえ，しかしこれのみが唯一の戦略ではないのだ，と。発言が<欠陥を持つ>ことは決して隠喩の必要条件ではない。サールは次の例を出している。たとえば英国の宰相ディズレイリが

(4)　I have climbed to the top of the greasy pole

と語ったとせよ。（日本流に言い直すと，この比喩はまず「危い橋を渡ったことがある」といったところだろう。）そして事実彼がかつて油で滑る柱を登る競技で勝をきそったことがあったとせよ。仮定により，たとえ(4)を文字通りにとってもそこに何の欠陥もない。つまりそれは真である。この事態は聞き手にも知られているとする。にもかかわらず，この発言が隠喩として話し手により意図され，この意図が聞き手により諒解されることは，十分可能である，と言わねばならない[21]。この反例には今までのとは違った特色がある。すなわち<作法の違反>，<欠陥>などが隠喩の必要条件でないことを示す従来の例は，否定（あるいは疑問）形の隠喩であったが，(4)は叙述的な肯定文である。この観察からどのような教訓がひきだされるだろうか。それはサンダースが文の<異例さ>(anomaly) について明言しているように「構文論的には整形だが（well-forwed），しかし意味論的にいわゆる異例な（anomalous）いかなる文であれ，それを解釈しうる文脈をそれに与えることが可能であるように思われる」[22]ということにほかならない。注意すべき点は，ここで言う「解釈」が字義通りの解釈のことだということにある。チョムスキーが生成文法の見地から選択規則に違反しており，したがって無意味な文としてあげた有名な例に

(5)　Colorless green ideas sleep furiously

というのがある。選択規則について簡単におさらいしておこう。動詞 sleep は x sleep という文を作るのに用いられるが，主語 x にはどんな名詞が立ってもかまわないわけではない。そこで x には〔＋生物〕という特性を持つ名詞のみが立つことができるという規則を設け，他方，辞書にかんしては「猫」，「子供」などの項には〔＋生物〕という特性を与え，「机」，「観念」などには〔－生物〕を与えておく。こうすれば規則によって「観念は眠る」などと

いう文は生成できないことになる。(5)はこの選択規則を何重にも破っていて非文法的であり，解釈ができないとされる。本当だろうか。実はチョムスキー自身，選択規則違反の文は，多少とも複雑で適切な文脈が補われる場合に，比喩として解釈しうることがしばしばあると述べている[23]。(5)をヤーコブソンは実際そのように解釈しようと試みた。今彼の言うように colorless green を pallid green（うすい緑色）の同義的表現であると認めることにしよう。そして彼は他の部分にも苦心の解釈を施し，全体として(5)を隠喩として釈きあかしたのである[24]。しかしサンダースの指摘はヤーコブソンのこうした鏤骨の解釈を，いともたやすい代替物と一挙に差し替えうる可能性を示している。そうするには薄緑色の観念が猛烈に眠るような可能世界を(5)に対応させるだけでよい。こうすれば(5)は字義通りに解釈されることになるのである。

たとえ＜異例な＞文，＜欠陥を持つ＞文であろうと，隠喩としてでも字義通りにも，好むままに解釈できないわけではない。しかしわれわれが極端まで行き過ぎたことは明らかである。なるほどサンダースの指摘するように，(5)も原理的には字義的解釈が施しうるだろう。しかしこの例について具体的に考える場合，そのような解釈が採られる見込みはほとんどないと言わねばならない。サールの反例(4)に戻ってみよう。サールが曖昧だというのは，彼が＜欠陥を持つ＞という範疇に四つの場合を数えながら，それぞれの内容を精確に規定しないまま，他方欠陥を持つことは必ずしも隠喩の条件の条件ではない，と述べている点にある。彼が自作した反例(4)を具体的な発語の状況を想いうかべながら見るなら，それがある意味で「会話原理」に反しており，したがって欠陥を持つ蓋然性が高い，と言わねばならない。この点はスペルベルらの有意性原理から明確な説明を与えることができる。ある会話の状況下でディズレイリが(4)の発言をした場合，聞き手は二つの解釈の可能性の前に立たされる。宰相はたんに過去の行状を憶いだして述べているにすぎない，と見るのが一つの可能性である。残された可能性は，話し手は過去の行為にことよせて，実は，多難であった政局についていささかの感慨を述べているのだ，と解することである。このどちらが選択されるべきかは，どちらが有意性原理に適うかによる。会話の参加者の共通知識，会話の文脈，話し手の表情，声調などが第一の可能性には見込みがないこと，換言すれば，そうした解釈が的外れであることを割り出すのに動員されるかもしれない。いずれにせよサールの反例は，有意性原理をくつがえさないのである。(5)にかんして言うなら，この文が字義通りに解釈される可能性は，原理的には残されているものの，しかし現実に即して考えてみるなら，ほとんど零にひとしいと言わねばならない。たとえば会話の参加者たちの共有知識の箇条に＜色のついた観念＞という項目はまずないだろう。まして，＜眠る観念＞という項目もないことはまず疑えないところである。やはり(5)にかんしては現実には隠喩的な解釈のみが試みられるだけであろう。この場合，解釈を導くのが有意性原理であることは言うまでもない[25]。

とはいえ有意性原理だけでは発言が隠喩か否かを特定するのには十分ではない。それは，発言が少なくとも字義通りには解しえないこと，したがって言外の意味や呼び起しに訴えねばならぬことを指図する診断基準にすぎないのである。有意性原理の初次的発動により診断がつき，言外の意味計算へと解釈過程が持ちこまれる場合，依然として有意性原理が働いている。では問題なのが隠喩であるとき，これ以外にどのような原理が関与するのだろうか。それは多くの論者が指摘するように類似原理であろう。すでに考察した連句の例を再考してみよう。

(6)　花みえぬ草は根さへや枯れぬらん

この句のおよその解釈が次に示すものである。

(7)　咲く花も見えないけれど，秋の草は，根までも枯れてしまったのだろうか（あの人への私の嘆きは，あたかもこのような詠嘆的疑問に喩えることができる）

(7)の構造について再説すれば，これは詠句という言語行為の内部に，当の言語行為について反射的注記を見出して，それを明示した形になっている。問題はこの注記にある。注記が括弧に挾まれているのは，それが語られた主要命題ではなくて，たんに示された付帯命題にすぎぬ事情を斟酌しての措置である。換言すれば，この注記は，本文について余白で指示を実演するという特異な性状を持っている[26]。注記の身振りによって聞き手は<比較>にいざなわれる。それゆえ，発言が隠喩であるかどうかの条件は，反射的注記が解釈者を比較へいざなうかどうかである，と定式化することができよう。

付帯命題の所作的指示という見地は一般化しうるだろうか。(7)をたとえば次の例と較べてみよう。酔った挙句にひどい乱暴に及んだ者について

(8)　奴は少し酔っている

と述べるのは，曲言法に相当する。実際(8)の言外に言われた真意は

(9)　奴はすっかり酔っている

ということにある。しかし既述のように，(8)は(9)を言外の意味として黙示することで首尾を完うするわけではない。なおその上に(8)はある可能世界を聞き手に想像させねばやまないのだ。それは家具を目茶苦茶にしてしまう程酔った人間にかんし，(8)を言うのが適切であるよ

うな世界である。そうした世界の呼び起しが，(8)に用いられた「少し」という語と聞き手が目のあたりにする酔漢の様子とのいちぢるしい齟齬に触発されたのは，明らかである。ここから逆にすじ道を辿るならば，(9)が実は(8)の真の解釈とは言えぬことがわかるだろう。われわれはその代りに

(10)　奴は少し酔っている（奴の酔いっぷりは「少し」と形容するにふさわしい）

をその大略の解釈として想定すべきなのだ。(8)が曲言法たりうる所以は発言(10)の実演性にある。話し手はある特有の調子で(12)を言い放ったのにちがいない。「少し」に強勢が置かれたのかもしれないし，発言全体が殊更らしい冷やかさで言われたのかもしれない。どんな表記法でも(12)のそうした実演性をそのまま文字に移すのには限度があるが，それでもいくらかの手段がないわけではない。「少し」に傍点を打つのはその一つの方法である。(10)の構造をみてみよう。これはありきたりの描写のための陳述であるが，ただ並のものと異る点は，描写の仕草について自己反射的注釈を伴っていることである。話し手は「私は「少し」と言っているのだよ」とわざわざ呈示しているのだ。言うまでもなく，この呈示（これを一口に＜あてつけ＞と呼ぼう）には有意性が欠けている。実際その男はそんなにひどく酔っているではないか。そこで聞き手は(10)の言外の意味を求めて(9)を割りだす。ところが(9)は，それを伴う(10)より有意性に富む。既述のように，言外の意味の計算は，それを伴う陳述が最大の有意性を持つように運ばれなければならない。それゆえ本来(9)は(10)より有意性の度が低くないと不都合なのである。こうして，黙示された含意の計算は暗礁にのりあげる。まさにこの時である。呼び起しに訴えるのは。(9)を黙示しながら(8)はその上にある世界を聞き手に想像させる。それがどんな世界かはすでに述べた[27]。繰り返しになるが，今一度そのまま記述を引用しておく。その世界は家具を目茶苦茶にしてしまうほど酔った人間にかんして(9)を言うのが適切であるような世界，ひと通りの酔い方がとても家具を壊す位の結果ではすまないような世界である。このような世界にかんするイメージが聞き手の受動的記憶に依拠しそこに材料を仰ぐ点では，会話の含みの計算の場合と同断なのだが，しかし記憶中にこうしたイメージが貯えられていてそれが直接検索されるのではない。実際，このイメージは記憶を材料に「再構成」されるのである。

陳述の実演性による呼び起しの解発という見地に一般化の可能性があることは，以上に例証された。その実演性のいかにという点にかんしては多少なりとも定型があるはずである。それは，舞台の演技や街で人びとが演じるジェスチャーに多少とも型がそなわるのと同じ事情である。演じる本人がどんなに斬新を誇っても，しばしばそうした演技は観客に受け容れられず失敗する。これと同じで，たとえば，(9)の定型を離れた新奇な示しの様態は，(9)をた

んなるたわごとにしてしまうだろう。しかしこの定型という制約をあまり狭く不変なものと考えるのも誤りである。たとえば悲しみのまさに形が，時代や場所によってさまざまでありうるように，実演性の様態に課せられた定型性は可変的なのである。

最後にブラックの，隠喩の同定にかんする懐疑論をとりあげたい。この問題についてわれわれはすでに有意性原理ならびに発言が示すものに含まれる「類似原理」を隠喩の同一性の条件として析出した。しかしまだこの問題については他の部面が残っているように思われる。ブラックの懐疑論の吟味によって，この不明確な箇所へ光を投じられないだろうか。

彼はこう述べる。ある発言がはたして字義通りに言われているのか，比喩として言われているのか，曖昧な事例はいくらでもありうる。それをその都度どちらかへ振り分ける不可謬の検査方法などはない，と[28]。ブラックの真意はどこにあるのだろうか。もしも彼がこの論点によって，隠喩／字義的なものという区別が妥当を欠くことを言いたいのだとすれば，もちろんわれわれはそれに与することができない。そして彼の真意も怖らくそうしたことにはないと思われる。曖昧な事例はどちらかへ片づけることができないからこそ曖昧なのである。たとえば「中年」とは何歳以上何歳以下の者を指して言うのか。二十歳が中年でなく，また七十歳もそうでないことは共に明らかである。しかし三十六歳や五十八歳はどうなのだろう。それは曖昧である。しかしこの事情は，だからといって「中年」という語に意味がないとか，中年の範囲を設定する手だてがないことを物語るものではない。以下，隠喩か否か曖昧な事例をいくつか列挙して逐一調べてみよう。

(1)成句あるいは隠喩としての喚起力を失ったいわゆる＜死せる隠喩＞ (dead metaphor) なのか，それとも生きた隠喩なのか，それとも文字通りに解されるべき表現なのか――こうした両方向にまたがる二重の曖昧さが出現する場合がある。次の二例を比較してみよう。

(11) John kicked the bucket

(12) When John kicked the bucket, he knocked it into the next county[29]

kicke the buket（バケツを蹴る）はスラングで＜死ぬ＞を言う成句である。(11)は文字通りジョンがバケツを蹴ったことの報告なのか，それとも彼が死んだことを言っているのか曖昧である。その上(11)は(12)のように言えば，ジョンの死がどんなにすさまじかったかを表現することができ，あながちたんなる死んだ隠喩とは言い切れないことがわかる。しかしながら，これまでの考察からこうした曖昧さが多くの場合事実上除かれうることは明らかであろう。そしてこの例は新たに生きた隠喩／死せる隠喩の区別が絶対的に与えられているのではないこと，死んだ隠喩を蘇生せしめる可能性がつねに残されていることを示している。

(2)すでに見たサールの「反例」を二つ目の意味の事例としてあげることができる。(4)が比

喩かどうか聞き手にとって判定しがたい場合が，確かにあるだろう。どうすればよいか。聞き手は話し手の語り口をつぶさに眺めるだろう。発言の形態のなかに比喩の標識を見つけるためである。それでも判定が難しいかもしれない。そんな場合，聞き手は手掛りを求めて「本当ですか」と反問すればよい。話し手が次に口を開いて言うことばが比喩かどうかの決着をつけてくれることもあるだろう。いずれにせよ多くの場合に，それが隠喩かどうかはわかるはずである。それでもその決着がどうあってもつかぬ場合が残ってしまうかもしれない。しかしこの事実は，隠喩／字義的なものの区別が無いことを示しはしないのである。それはたんに，もし聞き手に何の咎もないなら，話し手の言語行為のしくじりを物語るにすぎないのだ。また問題の区別は(4)が同時に隠喩であり，かつ字義的表現である可能性を排除しない。もっと精確に言えば，ある発言が，一方で隠喩として解釈され，他方字義的にも解しうるという二つの可能性を同時に実現する場合が存在する。それが<冗談>もしくは<洒落>にほかならない。

(3)すでに触れた点であるが，比喩とは言語による所作であるから，それに上手下手の別が伴うのは当然である。飛切り巧者な隠喩，まず隠当な隠喩，ぎこちない隠喩，まるで箸にも棒にもかからぬ隠喩など，さまざまな程度における隠喩が演じられるだろう。それゆえこのような仕方で隠喩なのかどうか曖昧な事例が出現することがありうる。しかし，言うまでもなく，こうした場合があるからといって，それが隠喩／字義的なものの区別が無いことの理由にはなりえない。それはたんに下手くそな，あるいは流産した隠喩にすぎないのである。

ブラックは決してこの区別を斥けてはいない。彼の真意はむしろおのおのの発言に内属する標識によって，それを隠喩と類別することができぬ，という点にある。彼は言う。事情はある発言が冗談か冗談でないかを，その発言に具わる指標によって判別できないのと同断だ，と[30]。仮に話し手が真面目に語っているときには必ず自分の親指を上に立てる仕草を行うべしという慣例が存在するとせよ。これを聞き手は冗談をいつでも安心して見分けられるだろうか。そうは問屋が卸さないのである。なぜなら話し手はその仕事を冗談にしてしまえるから[31]。

今当面している問題を一般化してこう問うことができる。そもそもある表現の持つ<象徴性>とは何であり，何によって知られるのか，と，スペルベルはこれに明確に答えている。「象徴性とは，物品，行為，言明，このいずれの特性でもなく，それらを記述し解釈する概念的表象（représentation conceptuelle）の特性である」[32]。念のためこの論点を再度敷衍しておこう。象徴の解釈は次のような模式として考えられる。情報（今の場合音声信号）はまず知覚装置に入力として受容され，一連の命題（概念表象）として同一指定され，さらに理性装置に入れられる。そこで命題の字義通りの解釈が施される。万一その解釈に失敗する場合は，象徴装置がそれを引き継がねばならない。すなわち，理性装置から象徴装置への

情報入力という操作が，概念表象の象徴性に対応するのである。象徴性とはいわば理性装置では手当てしきれぬ概念表象の傷にほかならない。音声信号としてのかぎりにおける「発言」には，傷つきやすい概念表象の脆弱さはない。この意味でそうした「発言」には，ブラックの述べるように隠喩の標識は内属していないのは明らかだ。というのも，象徴性は情報処理あるいは解釈の関数だからである。しかしもしもブラックがあらゆる意味で，発言には隠喩の指標が伴いえない，と主張するなら，われわれはこれを受けいれることができない。理性装置が情報処理を象徴装置にゆだねるか否かは，解釈されるべき概念表象の性状次第である。話され聞かれうる発言は象徴性の指標（これを短く＜象徴指標＞と言おう）を何らかの形で担っているはずである。しかしこの象徴指標をどのように把握すべきか。これは残された大きな問題にほかならならない。われわれはすでに隠喩の解釈過程に括弧に挾まれた付帯命題を伴うある種の命題が出現するのを認めている。こうした形態を持つ命題が構想された所以は，隠喩まじりの発言が何らかの象徴指標を担っているはずだというわれわれの予想に求められねばならない。この点を手短かに例証しよう。それには隠喩と直喩（simile; comparaison）を比較するのが便宜であろう。

次の発言は直喩の一例である。

(13)　あの男は狐のような狡い奴だ

この種の発言が伝統的に＜直喩＞に分類されてきたのは，それが「SはPである」と言い切るかわりに「SはRのようなPである」といった形をそなえているからにほかならない。発言中の言語要素「のような」は，明らかに，(13)が直喩であることを示す指標すなわち広い意味での象徴指標として機能している。同様に，「に似た」，「そっくりの」，「めいた」，「風の」，「形の」，「ほど」，「くらい」，「よりも」，「顔まけの」など，際限のない語句を同じ働きのために使用しうる[33]。今こうした指標の多様さを度外視して，それを「のような」に代表させよう。すると一般にこう言うことができるように思われる。発言が直喩であるための一つの必要条件は「のような」が使用されることである，と。この逆が必ずしも成立たぬことに注意しなければならない。発言中に「のような」が使用されているからといって，それが直喩であるとは限らないのである。たとえば，

(a)　以下のような条件を要求します

(b)　この本は前に読んだような憶えがある

(c)　子供のような真似をするな

のおのおので問題の句はそれぞれ<例挙>，<婉曲な断定>，<侮蔑>などの働きに役割を演じているのであって，直喩の象徴指標とは言えない[34]。その上，たとえ「のような」が明らかに<類似の呈示>として機能する例においても，それは必ずしも直喩を構成しないのである。たとえば，

(d)　その娘は母親のような美人であった

は，娘と母親をその美貌の点で比較しているが，しかしこの発言には真の直喩にそなわるイメージの喚起力が欠けている。(d)が直喩になりえないのはそれが定義通りの解釈で有意性原理をみたすからにほかならない。

直喩(13)によく似た隠喩(14)を考察してみよう。

(14)　あの男は狐だ

直観にはこれが隠喩であることは十分明らかだが，ではここに(13)の「のような」に匹敵する象徴指標はそなわっているだろうか。すでに指摘したように，これまでの理論的見地からすれば，この問を当然肯定しなければならない。ではその指標とは何だろうか。(13)においては実質的な要素が指標の働きをしていたが，(14)ではもはやそうした要素を指標として採りあげる余地がないことは明らかである。そこでは構造的な言語要素が指標として機能しているにちがいない。ここで想起されるのは，リチャーズ，ブラックらの古典的隠喩理論である。ブラックは(14)に「狐」という<焦点>（focus）とそれ以外の語句から成る<枠>（frame）とを区別した[35]。その上で，この二つの部分の「相互作用」によって隠喩の効果が生じる，と説いたのである。これがいわゆる隠喩の<相互作用説>にほかならない。この説そのものの再検討には別に主題として取り組む予定でいる。ここで注目すべきは，象徴指標にかんする上の区別の意義だろう。枠の一部である「男」は少なくとも〔＋人間〕という意味特性を持つのに対し，焦点「狐」は〔－人間〕をそなえている。それゆえ(14)を型文と見なした場合，それは意味論的にすでに異例で（amonalous）ある。この事態を(14)はア・プリオーリに偽である，と言いあらわしてもよい。こうした文の性状は場合によっては発言(14)をたんに言葉づかいの誤りとして，つまりノンセンスとして，捨てさせるだろう。しかしそのような無頓着な処置がとれない場合もありうる。このとき，そうした文の性状は意味論的水準における象徴指標として機能するはずである。(14)のおよその解釈は次のようになるだろう。

(15)　あの男は狐だ（彼の性格はあたかもこのような同一視に喩えて言い表わすことができる）

ここで注意したいのは，以上の考察がすでに言及した選択規則違犯を再説しているのではないという点である。われわれは選択規則の違犯が隠喩の十分条件だと述べているのではない。(14)は隠喩ではなく，たんにア・プリオーリに偽の発言かもしれないのである。(14)には確かに違犯の跡がある。しかしここで留意すべき点はそのことよりむしろ違犯にもかかわらず(14)がノンセンスとして処理されない可能性の方なのである。この可能性，換言すれば，「狐」を焦点化し，他の部分を枠と見なすという働きは，確かに選択規則違犯により触発されたものである。しかしその働きはあくまで自立的な機能として認められねばならない。この働きを律するものをわれわれは有意性原理と呼ぶ。この原理に対応するかぎりにおいて選択規則違犯ははじめて焦点／枠という隠喩の象徴指標として現実化されるのである。その上，焦点化の機能はたんに選択規則違犯のみならず，他の意味論的異例の形態によっても触発される。この事実は選択規則違犯が，ある論者の主張するのとはことなり，隠喩の必要条件でもないことを示している[36]。たとえば(4)がそれを示す例であり，次の例も同じである。

(16)　彼はいつも横車を押す

ここに選択規則を破った痕跡はみあたらない。彼は現に横車を押しているわけではないから，文字通りに解すならこの文は偽にすぎない。しかし有意性原理は(16)を偽としてしまうよりむしろその言外の意味を割りだすよう解釈過程を導くだろう。こうして<横車を押す>が焦点化されるのである。

サールは隠喩がつねに焦点／枠という区別を具えるとは限らないといってブラックの観察に反対している。もしサールの異論が正しいなら，隠喩の象徴指標をこの区別に求めたわれわれの企ては失敗に帰することになるが，真相はどうなのだろうか。彼は反例として次をあげている。

(17)　Sally is a block of ice

一見ブラックの分析は正しいように見える。Sally は字義通りに固有名として使用され，a block of ice は本物の氷の塊を言うわけではなく，要するにそれは隠喩として使用された語句なのである。しかしサールに言わせれば，(17)における Sally の字義的出現には必然性はない。サリーがなにかにつけ厭な報せをもってくる女だとしよう。そこで，主語を the bad news と隠喩化してしまい，ついでに in にも同じ処置を施してしまおう。するとどこにもいわゆる「枠」の見当らぬ表現

(18) The bad news congealed into a block of ice

が得られる。ご覧のとおりこの例には，問題の区別が具っていないのだ[37]。

サールの指摘をまつまでもなく，個別の表現につねにその区別を見出しうるとは限らない。たとえば，<譬え>，<諺>のたぐいはその種の隠喩の一形態と見なすことができる。一二例をあげておこう。「一石二鳥」，「犬も歩けば棒にあたる」など。これらに枠／焦点の区別を引くことはできそうにない。こうした形態のさらに展開を遂げたものとして寓話（たとえばイソップ物語，話の末尾に教訓という字義通りの言明が添えられることが多い），諷喩，神話などを教えることができる[38]。すでにわれわれは連歌を分析したが，下の句が上の句全体を隠喩と化すさまを目撃している。これも問題の区別の見あたらぬ一例だろう。しかしながら，このような形態の存在は区別そのものの無の証明にはならないのである。(18)に戻って考えてみよう。確かにここには区別がない。しかしこの隠喩の意味を解しうる者は，実はひそかに次の隠喩を理解していたのでなければならない。

(19) Sally is the bad news

なぜならレヴィンの指摘のように[39] もしもあらかじめ the bad news がサリーのことを言うのだと知らぬなら，(18)を理解するのは不可能だからである。一般的に言って，任意の隠喩に問題の区別が見当らないからといって，当の隠喩の構成にそもそもこの区別が関与していないことには必ずしもならないのだ。要するに，焦点／枠という区別は，場合により隠喩の文脈に属するか（連歌），隠喩により前提されているか（例(18)），あるいはこれら両者の混合によって与えられるか（諺，神話など），このいずれかなのである。（末完）

〔註〕

1) Black, M., 'Metaphor' in Black, M., *Models and Metaphors*, 1962, p. 33.
2) スネル，B.,『精神の発見』，1979², 創文社.
3) Edie, J. M., *Speaking and Meaning*, 1976.
4) Black, M., 'More about Metaphor' in Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979.
5) スネル，前掲書，p. 4.
6) *Ibid.* 精神を言葉になぞらえる考え方は長い伝統を保っている。聖書，プラトンの古くから，近世の<心的談話>（ホッブス）を経て，現代のメルロ・ポンティ，ギーチ，セラーズなどの哲学，ラカンの精神分析など，いずれもその例である。こうした考え方を精神の言語への<類比理論>と呼ぼう。類比理論の基礎の一つはまさに<必要な隠喩>にある。
7) *Ibid.*, p. 359.
8) Cassirer, E., *Language and Myth*, 1946, p. 88.
9) 「発見する」に相当する印欧語 discover, découvrir, Entdecken などは，いずれも<覆いを取りのけてあらためて見出す>意をあらわす。「発（發）」の語原はそれとは大分趣きを異にするが，しかしそこにも<取りのける>という要素は含まれている。すなわち「發」は<左右の足と手で草を

踏み分ける>形で，これに「弓」が伴って，全体として<力をこめて弓を射るようにはねのける>意味であるという。

10) Black, M., 'More about Metaphor', p. 39.
11) Carroll, J. B. (ed.), *Language, Thought, and Reality : Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, 1956, p. 13.
12) 白川　静，『漢字』，1970，岩波書店，pp. 48-49.
13) *Ibid.*, p 54.
14) Edie, J. M., *op. cit.*, ch. V.
15) *Ibid.*
16) Quine, W. V., 'Two Dogmas of Empiricism', 'The Problem of meaning in Linguistics' などの論考を参照。いずれも *From a Logical Point of View*, 1963に所収。
17) 'Metaphors', p. 29.
18) Davidson, D., 'What Metaphors Mean' in Sacks, S. (ed.), *On Metaphor*, 1979, p. 29.
19) 菅野盾樹，「文彩一修辞の記念論から修辞の認識論へ」，『年報人間科学』，第3号，1982，大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室，p. 14 を参照。同じ見解は Beardsley, 'Metaphor', in Edwards, P. et al. (eds.), *Encyclopedia of Philosophy*, vol. 5/6, 1972; Loewenwerg, I., 'Identifying Metaphors' in Johnson, M. (ed.), *Philosophical Perspectives on Metaphor*, 1981 にも見られる。
20) 菅野盾樹，前掲論文，p. 16.
21) Black, M., 'More about Metaphor', p. 35.
22) Sanders, R., 'Aspects of Figurative Language; *Linguistics*, No. 96 (1973), p. 60, Loewenwerg, *op. cit.*, p. 161 に引用。
23) Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, 1965, p. 149.
24) 川本茂雄，『ことばの色彩』，1978，岩波書店，pp. 94-95 の記述による。
25) 二つの解釈のあいだの選択が共有知識に相対する有理性原理次第であるという見地は，いくつか非常に興味ある論点を伴っている。第一に，これはサールが別に詳しく説いているところであるが，文（発言ではない）の<字義的意味>とは文脈を抜き去った場合にその文が持ちうる絶対的意味ではなくて，すでに一群の仮設，知識などに相対する，その意味で相対的意味にほかならないこと（Searle, J. R., 'Literal Meaning' in Searle, J. R., *Expression and Meaning* 1979 を参照)。第二に，隠喩的解釈は字義的解釈と両立しえないどころか，隠喩的解釈の部分的構成として字義的解釈が解釈過程に介入すること。つまり，呼び起しによって構成される可能世界には発言の字義的解釈が対応するのである。この点に関連して，「隠喩的解釈」の両義性につき念のため注意を喚起したい。それは第一の意味では，字義的解釈と対立する。これを特に「言外の意味の計算」と呼ぼう。別の意味では二つの解釈は両立する。これが本来の隠喩的解釈であって，呼び起し（evocation）の解発がそこに含まれている点で前者から区別される。
26) レカナティ，『ことばの運命』，新曜社，1982，第7章参照。
27) 菅野盾樹，前掲論文，p. 19.
28) Black, M., 'Mare about Metaphor', p. 36.
29) Morgan, J. L. 'Observations on the Pragmatics of Metaphor' in Ortory, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979, p. 142 の例である。
30) Black, M., *ibid.*, p. 36.
31) *Ibid.*
32) スペルベル，D.，『象徴表現とはなにか』，紀伊国屋，1979，p. 180.
33) 佐藤信夫，『レトリック感覚』，1978，講談社，p. 70 に引用された中村明（『比喩表現の理論と分類』，秀英出版，1977）の観察。
34) 最後の例は直喩とも重なりあう。菅野盾樹，「種について」，『大阪大学人間科学部紀要』，第4巻，1978，第Ⅴ章を参照。
35) Richards は tenor/vehicle (*The Philosophy of Rhetoric*, 1936, 1965, ch. 5), Beardsley は subject/modifier (*op. cit.*) という名称でほぼ同じ区別を観察している。
36) Matthews, R. J., 'Concerning a 'Linguistic Theory' of Metaphor', Foundations of Language 7 (1971) を参照。関連の議論および興味ある観察が次に示されている。安井稔，『言外の意味』，1978，研究社，ch. 13-16.

37) Searle, J. R., 'Metaphor' in Ortony, A. (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979, p. 103 f.

38) これにすでに言及した<冗談>やまた<謎>を追加できるが，詳しく見るとこの二者と前者のグループには差異がある。ある種の冗談が字義的と隠喩的と二つの解釈が重ね合わせられたときにその効果を発揮することはすでに述べた。謎にもその種の解釈を要求するものがある。例，「水にはいってもぬれない，まっくろけの人まねさんは，なーに」，その答は「影」。それ以外にもこの二者には前のグループと相違する点がある。すなわち，これらは純然たる言語遊戯であるが，寓話その他はその部類には入れられない。

39) Levin, S. R., 'Standard Approches to Metaphor and a Proposal for Literary Metaphor' in Ortony, A., (ed.), *Metaphor and Thought*, 1979, p. 126.

METAPHOR: ITS EXISTENCE AND ITS IDENTIFICATION

Tateki SEUGENO

The interpretation of metaphors, as a process, has to take at least two steps. First the hearer must decide whether speaker's utterance should be interpreted literally or rather metaphorically. Second, if he takes it to be a metaphor, the hearer should caluculate its implied meaning. Well then, by what critelia can he identify metaphors? To answer this question is our paper's main object.

DO METAPHORS EXIST?

In most cases we are quite sure intuitively if we are or arn't confronted with a metaphor. Nevertheless our intuition sometimes is not able to distinguish between literal and metaphorioal expressions. Someone argues that metaphors are made to fill gaps in vocabulary. We may call such a argument "catachresis-origin theory of metaphors". But if this theory was in the right, all metaphors would evaporate at once, because a catachresis, if it succeeds, has merely another meaning different from its initial one (e. g. a "nose" as a catachresis stands for a prow. So the word is simply ambiguous).

We are confronted with a serious question. Are there metaphors on earth? Examining closely this question, we argue that there are "necessary metaphors" i. e. those metaphors that cannot be paraphrased into any literal expressions and that especially we cannot help using metaphors with respect to our own selves. We, however, should not adopt some opposite extreme viewpoint that language as a whole is metaphoric. In fact there is no place for metaphors in syntactic and semantic levels. Metaphors are fundamentally of pragmatic nature to the extent that they cannot begin without our using words.

HOW TO IDENTIFY METAPHORS

Chomsky has said that sentences that break selectional rules (a famous example is "colorless green ideas sleep furiously") can often be interpreted metaphorically. Not a few people argue from a similar point of view. For example Paul Grice proposes the idea that utterances that violate a conversational rule can be accepted as figures of speech. On the contrary, we argue that such a condition is neither necessary nor sufficient for an utterance to be metaphorical. We try to develope the "principle of relevance" (Sperber and Wilson) in order to prove that it is necessary for an utterance

to be a metaphor to go against that principle.

Are there any other conditions? To detect them we have to introduce a distinction about linguistic expressions between what is represented or said by them and what is indicated or pointed in them. For example, the verb "run" represents an action and indicates its own nature of being a verb. In the same way a metaphor e. g. "man is a wolf" represents a state of affairs that man is a cruel creature and indicates a similarity between man and a wolf. We conclude that the principle of similarity contributes to our making metaphors. In other words that principle is another necessary condition for an utterance to be a metaphor.

Lastly we argue that the distinction above-mentioned correspondents to another one, that is, the distinction between "frame" and "focus" (Max Black) on the surface structure of utterances.